特集

実は開運?!三重の閻魔様

冠を被り、中国の官人風の服を身にまとい、怒りの表情でにらみつける…。

私たちが思い描く閻魔様の姿は、どこか恐ろしく近寄りがたい存在です。幼いころに〝嘘をつくと閻魔様に舌を抜かれるよ〟といわれた方もいるのではないでしょうか。

古代のインド神話のヤマ神を起源とする閻魔は、仏教に取り入れられて死後の世界の支配者になったとされます。その後、中国において道教の冥界思想の影響を受け、死者の生前の罪を裁く裁判官、閻魔大王となりました。やがて、閻魔大王が地獄で救いの手を差し伸べるという地蔵菩薩の化身であるという信仰が普及し、日本でも広く受け入れられるようになりました。

今回は、三重県内に祀られている閻魔様を中心にご紹介します。

※えんまの漢字表記は、閻魔・焔魔・夜魔などがありますが、今回は閻魔で統一しています。

※各寺社内の閻魔堂および閻魔像などに関する拝観日時や受け入れ人数・受け入れ方法などには違いがあり、状況に応じて延期や休止の場合があります。事前に必ずご確認ください。

取材・文…中村 真由美・中村 元美・堀口 裕世
撮影……梅川 紀彦・尾之内 孝昭・中村 元美
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

「閻魔堂」内中央に祀られている閻魔像

地域の人々が守り伝えてきた「えんまさん」の話

猪名部神社【員弁郡東員町北大社】

4月の第1土・日曜日、猪名部神社では春の大祭「大社祭」が行われます。祭りのハイライトは、人馬一体となって土壁を駆け上がる「上げ馬神事」でしたが、最近は神社周辺を練り歩く「馬曳き神事」へと様変わりしています。

「内容は変わりましたが、神事を始める前には、今でも必ず『閻魔堂』などにお参りしています」と教えてくれるのは、宮司の石垣 光麿さん。お話の「閻魔堂」は、境内奥に「薬師堂」「毘沙門堂」とともに並び建っていました。普段はガラス越しの参拝となりますが、この日はご厚意で堂内に入ると、中央の高い位置に堂々とした姿の閻魔像、左右には高さ40から50センチメートル程度の十王像などが並んでいました。

「馬曳き神事」※

左手前から「薬師堂」「閻魔堂」「毘沙門堂」

閻魔像の左右に整然と並ぶ十王像など

宮司の
石垣 光麿さん※

十王とは、死後の世界にあって死者の罪を順番に裁く10人の王のこと。たとえば、初七日を司るのは秦広王、二七日は初江王と続き、閻魔大王は五七日、10人目の五道転輪王は3回忌の裁判を担当します。こうした十王信仰は、中国の唐時代末期に成立したといわれ、日本では中世以降に死者への追善供養とも結びつき、民間にまで普及しました。やがて、十王それぞれに本地仏も定められます。本地仏とは、仏が人々を救済するために仮の姿を借りて現れるという説に基づいたもので、閻魔大王の場合は、地蔵菩薩が本地仏とされました。なお、堂内には十王像に加えて、葬頭河(三途の川)で死者の衣服を剥ぎ取る葬頭河婆(奪衣婆)や、冥界の役人である五道冥官も揃っています。それぞれに表情も豊かで、親しみやすさを感じます。

各像の制作年などは不明ですが、『東員町史』では「北大社のえんまさんの話」として紹介され、「800年も1000年も前から守ってきたのです」と綴られています。「えんまさん」は、地域の人々の心の拠り所として、今後も大切に守られていくでしょう。

お問い合わせ

猪名部神社
TEL 0594-76-2424

※印の写真は取材先から提供していただきました

秘仏の閻魔様と「赤えんま様」が導く、「えんまの寺」

金井山 林光寺

【鈴鹿市神戸】

秘仏の閻魔様

「赤えんま様」

旧伊勢街道の宿場町であると同時に、神戸城の城下町として賑わった鈴鹿市神戸には、「えんまの寺」と称される古刹があります。金井山 林光寺です。

天平12(740)年、聖武天皇の勅願所として開創されたと伝わる林光寺は、江戸時代には神戸城主・本多氏の祈願所として栄えました。本尊は、平安時代後期作の木造千手観音立像(国指定重要文化財)ですが、秘仏のため、開帳は年に1回のみ。毎年、8月9日の夜10時30分から10日の午前1時までとなっています。この林光寺に「閻魔堂」が創建されたのは、南北朝時代後期(1300年代後期)のころ。身寄りのない死者や、病没した遊女、水子など不幸な人々を供養するために建立されました。祀られている閻魔像は2体で、その内の1体は秘仏のため、拝観できるのは「えんま会式」が執り行われる2月16日と8月16日の2日間のみになっています。

住職の内田 景康さんの案内で、まずは本堂に入ると、華麗な色彩と精緻な彫刻の数々に目を奪われました。「現世(現在の世)を表現しているのです」と教わります。これまでに多くの人々が厄除け開運、病気平癒などの現世利益を祈願してきたことでしょう。

住職の内田 景康さん

「閻魔堂」外観

極彩色に彩られた本堂内部

奪衣婆像

本尊が納められている厨子に手を合わせた後は、「閻魔堂」へ向かいます。堂内の中央には青く彩色された厨子、左側には閻魔像、右側には奪衣婆像が並んでいました。左側の閻魔像は、大柄な成人男性ほどの大きさがあり、迫力十分。顔は赤く、眉をひそめて口を大きく開けているため、一見すると激しく怒っているようですが、しばらく眺めているうちに、慈愛の心を秘めているようにも見えました。「赤えんま様」の通称で親しまれているのも頷けます。また、奪衣婆像の大きな丸い目からも、優しさが伝わりました。

秘仏の閻魔像が納められた厨子

青い厨子の前には、丸い鏡が置かれていました。これは、死者の生前における善悪の所業を映し出すという「浄玻璃の鏡」です。また、左右には、閻魔大王の従者とされる司命像と司録像が厨子を守るように控えていますが、この日は特別に扉を開けていただきました。秘仏の閻魔像は、身に着けている冠や衣服の彩色がほとんど褪せることなく、肌の色も人間に近いため、今にも動きだしそうです。住職によれば、子どもたちは「『赤えんま様』より怖い」というとのことですが、その感想も納得できました。それでも、地蔵菩薩の化身という思いで改めて手を合わせていると、叱咤激励されているようにも感じました。

「えんまの寺」の閻魔様たちは、これからも人々の心を励まし、導いてくれるでしょう。

お問い合わせ

金井山 林光寺
TEL 059-382-0610
拝観時間 8時~17時

津のまちを守る大きな黒い閻魔像
阿古木山 真教寺
【津市下弁財町】

閻魔王座像

真教寺の閻魔堂は、津市の阿漕浦に近い「津興」と呼ばれた地域にあります。この地は、津の城下町が形成される以前、港町として栄えた阿濃津の中心地であった場所で、城下に中心が移動した江戸時代以降は、伊勢街道の宿場町への入り口としてにぎわいました。藤堂藩の二代藩主・高次公（1602～1676）が、津のまちの守りとして、閻魔大王をご本尊とする真教寺を建立されたといわれます。それ以来の長い年月、この閻魔像は行きかう旅人を守り、地元の人々に敬愛されてきました。お堂の前にあるバス停の名も「エンマ堂前」となっていて、長い歴史と人々との深いつながりがしのばれます。

お堂の中央で黒光りする閻魔座像は、見上げる大きさ。大きく見開いた目に力のある憤怒の形相です。左右に従えた脇侍の俱生神、閻黒童子も活き活きとした表情や躍動感のある姿勢など、迫力のある表現がされています。この3体の像は、胎内にあった書付によって、天和2（1682）年、京都七条仏所の仏師・作左衛門、伝内の作ということが分かっていますが、津のまちには、閻魔像の首は、高次公が朝鮮出兵の際に持ち帰った関羽（中国の三国時代の武将）あるいは子路（中国の春秋時代の人。孔子の弟子で武勇に優れた）の像のものだという伝説が残っているということです。ほかにも、閻魔像の前には、懸衣嫗の像や罪の重さをはかる天秤などが並び、死者を裁く様子が再現されています。

俱生神半跏像

閻黒童子半跏像

閻魔像の右に並ぶのは、阿弥陀如来の坐像で、こちらは穏やかなお顔。木造で箔が施されていますが、藤堂家ゆかりの仏像という以外に詳細は伝わっていません。その作風から平安時代後期の作と考えられています。

また、左側にあるのは、円空（1632～1695）作と伝わる十一面観音立像です。高さ約236センチのすらりとした立ち姿で、円空初期の力作と言われています。粗い鉈目の小さな像が多い円空仏の中で、この像は大きく、〝鉈はつり〟という彫法で作られた優美な姿。飛鳥時代の仏像の影響を受けているといわれ、お顔もほのかに笑みを含んだアルカイック・スマイル。台座から頭部まで一本のヒノキでつくられているということです。閻魔像と十一面観音像は三重県の有形文化財に指定されています。

現在は、津市乙部にある妙雲寺の松浦実昭住職がこのお寺の住職を兼務されています。「父がここの住職でしたので、引き継ぎました」とのことで、二代にわたりこのお堂を守っておられます。

住職の松浦 実昭さん

お問い合わせ

阿古木山 真教寺
TEL 090-2770-8516
松浦 実昭住職

阿弥陀如来坐像

円空作といわれる十一面観音立像

閻魔堂

怖いけれど親しみ深い赤い閻魔様

普照山 信楽寺

【松阪市垣鼻町】

閻魔大王座像

松阪市垣鼻町。名古須川に架かる小さな石橋のたもとに数基の石灯籠が並び、カーブを描く道や家並みの様子にも旧伊勢街道の面影がしのばれます。この道に面して、信楽寺の閻魔堂があります。

格子越しにのぞき込むと、つややかな朱赤の顔をした大きな閻魔様が見下ろしています。そのお顔は、迫力に満ちて怖いのだけれど、どこか少しユーモラス。親しみ深い表情です。お顔だけではなく、胸に龍が描かれた道服なども、色鮮やかなまま残っています。

仏足石

閻魔像の左右には、筆を持った書記役の司命と司録と思われる像が立っています。そして、その前には、三途の川で死者の衣服をはぎ取って木の枝に掛け、その重みで罪の軽重を量るという奪衣婆や、閻魔の本地仏とされる地蔵菩薩など、閻魔にかかわる像が並びます。台のようなものに二つの頭部が載っているのは、人頭杖または檀拏幢と呼ばれ、一方の首は死者が生前に行った悪事を、他方は善行を知っていて、裁きの際にそれを語るとのこと。死後の世界で、人間の生前の行いを裁く恐ろしい場面なのですが、閻魔大王の像と同じように、眷属たちもいかめしい中にもどこかかわいい、味のある表情です。

住職の小泉 友範さん

閻魔堂の横には、天明5(1785)年に立てられたという仏足石があります。その隣にある山門を入ると、手入れの行き届いた境内の正面に本堂があり、左手に立つ縁起を記した碑や句碑の奥は墓地へと続いています。

「この閻魔堂も閻魔像も、どの時代に誰によって造られたかなど、詳しいことは伝わっていないのです」と話してくださったのは、18代目の住職である小泉友範さん。祖父の代からこのお寺を守っておられます。

信楽寺の縁起は古く、天平時代にさかのぼるそうです。第45代聖武天皇の勅命により神宮へ仏舎利を奉納した際、この地域に日照山 保延寺という寺院を建て、ここにも仏舎利を納めました。この保延寺は伽藍の立ち並ぶ大寺でしたが、戦国時代に焼失し、ただ一つ、念仏堂だけが焼け残ったといいます。永盛という僧がこのお堂にこもって終夜念仏したところ、光明の射す焦土の中から仏舎利五輪塔を発見し、再興したのがこの信楽寺であると、第9世真承上人という方の板木にあるそうです。現在の本堂は、寛永20(1643)年に再建されたもので、閻魔堂や閻魔像も同じころのものだろうと考えられているのです。

長い歴史を持つ古刹で、街道沿いの閻魔像は、ずっと地元の人々の信仰を集めつつ、にらみを利かせてきたのです。

お問い合わせ

普照山 信楽寺
TEL 0598-23-2844

閻魔堂

先代住職が建てた碑

本堂は江戸時代前期の建築

きらびやかな本堂内

怖いけれど親しみ深い赤い閻魔様

普照山 信楽寺

【松阪市垣鼻町】

閻魔大王座像

松阪市垣鼻町。名古須川に架かる小さな石橋のたもとに数基の石灯籠が並び、カーブを描く道や家並みの様子にも旧伊勢街道の面影がしのばれます。この道に面して、信楽寺の閻魔堂があります。

格子越しにのぞき込むと、つややかな朱赤の顔をした大きな閻魔様が見下ろしています。そのお顔は、迫力に満ちて怖いのだけれど、どこか少しユーモラス。親しみ深い表情です。お顔だけではなく、胸に龍が描かれた道服なども、色鮮やかなまま残っています。

仏足石

閻魔像の左右には、筆を持った書記役の司命と司録と思われる像が立っています。そして、その前には、三途の川で死者の衣服をはぎ取って木の枝に掛け、その重みで罪の軽重を量るという奪衣婆や、閻魔の本地仏とされる地蔵菩薩など、閻魔にかかわる像が並びます。台のようなものに二つの頭部が載っているのは、人頭杖または檀拏幢と呼ばれ、一方の首は死者が生前に行った悪事を、他方は善行を知っていて、裁きの際にそれを語るとのこと。死後の世界で、人間の生前の行いを裁く恐ろしい場面なのですが、閻魔大王の像と同じように、眷属たちもいかめしい中にもどこかかわいい、味のある表情です。

住職の小泉 友範さん

閻魔堂の横には、天明5(1785)年に立てられたという仏足石があります。その隣にある山門を入ると、手入れの行き届いた境内の正面に本堂があり、左手に立つ縁起を記した碑や句碑の奥は墓地へと続いています。

「この閻魔堂も閻魔像も、どの時代に誰によって造られたかなど、詳しいことは伝わっていないのです」と話してくださったのは、18代目の住職である小泉友範さん。祖父の代からこのお寺を守っておられます。

信楽寺の縁起は古く、天平時代にさかのぼるそうです。第45代聖武天皇の勅命により神宮へ仏舎利を奉納した際、この地域に日照山 保延寺という寺院を建て、ここにも仏舎利を納めました。この保延寺は伽藍の立ち並ぶ大寺でしたが、戦国時代に焼失し、ただ一つ、念仏堂だけが焼け残ったといいます。永盛という僧がこのお堂にこもって終夜念仏したところ、光明の射す焦土の中から仏舎利五輪塔を発見し、再興したのがこの信楽寺であると、第9世真承上人という方の板木にあるそうです。現在の本堂は、寛永20(1643)年に再建されたもので、閻魔堂や閻魔像も同じころのものだろうと考えられているのです。

長い歴史を持つ古刹で、街道沿いの閻魔像は、ずっと地元の人々の信仰を集めつつ、にらみを利かせてきたのです。

お問い合わせ

普照山 信楽寺
TEL 0598-23-2844

閻魔堂

先代住職が建てた碑

本堂は江戸時代前期の建築

きらびやかな本堂内

弁柄塗りが美しい閻魔堂は県指定の有形文化財

平野山 常住寺

【伊賀市長田】

入母屋造の本瓦葺きの閻魔堂

石段を上がった境内で振り返ると、広々とした田園とその先には伊賀上野城。すばらしい眺望の丘陵に建つ常住寺は、室町時代にすでにその存在が広く知られていました。人々の信仰を集めた寺の閻魔像が、天正20(1592)年に奈良市の元興寺極楽坊で開帳されたと伝わり(『多聞院日記』)、近世には江戸でも開帳の機会がありました。かつては「琰王寺」と呼ばれ、境内には伊勢津藩の初代藩主・藤堂 高虎の妻、松寿院の供養塔(市指定文化財)があり、ここは藤堂家にとって特別な地であったことがわかります。

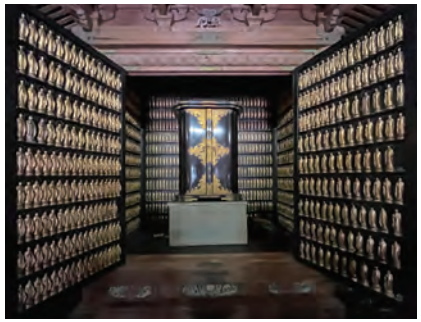
弁柄塗りの赤い外壁が目を引く閻魔堂は、慶長7(1602)年に筒井 定次が母の三十三回忌の際に建立したものを、万治3(1660)年に藤堂藩の2代藩主の藤堂 高次が、母松寿院、つまり高虎の側室の十三回忌に合わせて再建したものです。その後、元禄3(1690)年、享保15(1730)年、明和8(1771)年、安政3(1856)年のすべて、時の藩主により城代家老以下、藩の重役を奉行として修復が加えられ、長年大切に守られてきました。

その建物は入母屋造の平入り、本瓦葺きで、正面には張り出した向拝を付け、四周に縁を廻らせています。柱の上の組物は出三斗、中備は蟇股、軒は二軒繁垂木という一つひとつに見応えのある構造で、平成8(1996)年、県の有形文化財に指定されています。

堂内は閻魔像が納められた厨子を安置する内陣と、礼拝する外陣からなっていて、中央の二天柱、須弥壇厨子などは極彩色で華やか。内陣の格天井、外陣の竿縁天井がその空間をはっきりと区別しています。

「秘仏のご本尊さんは、一寸八分で5センチほどの大きさです。持仏として持ち歩いたのでしょう。厨子は外、中、奥と三重に置かれていて、外厨子内側の壁面に千体阿弥陀仏が祀られています」と寺の住職の森 喜良さん。黒漆の中厨子の内面には極彩色で描かれた十王図が掛かり、奥厨子に木造閻魔坐像が安置されています。これらも県指定の文化財となっています。

内陣の華やかな造りを前に拝礼



外厨子内側に祀る千体阿弥陀仏

常住寺の縁起は、天台宗の僧、尊恵上人が伊勢参宮からの帰路、このあたりに閻魔王を祀ったのが始まりと伝えられています。尊恵上人は承安2(1172)年、閻魔王の使者に誘われ閻魔の庁へ赴き、閻魔王像を持ち帰ったとされる僧です。「亡くなって五七日の日(35日)に、みなさんお詣りに来られます。極楽への分かれ道です。延寿、除災、除病、追福、それと閻魔さんの本地が地蔵菩薩なので安産祈願も盛んでした。お供えはこんにゃく。一度茹でると冷めるのが遅いので、女の人が腰を冷やさないように

境内の松寿院の供養塔(一番右)

と願ったのでしょう」。また1月16日と8月16日は、閻魔の大賽日にあたり、薮入りといって閻魔堂へのお詣りで賑わったようです。「正月に里帰りしても16日までは帰らず、親の供養をするために閻魔さんにお勤めしたようです。今はしきたりが薄まってきてますけどね」と森住職。死者救済を願うためにと信仰されてきた閻魔堂をお詣りすれば、伊賀の歴史も垣間見れるでしょう。

お問い合わせ

平野山 常住寺
TEL 0595-23-1594

正面に伊賀上野城を眺める

弘法大師の師、勤操大徳が開かれた寺の閻魔堂

丹生山神宮寺

【多気郡多気町丹生】

色鮮やかな閻魔王天を含む十王が安置される

地元の人々に〝丹生のお大師さん〟として親しまれている丹生山 神宮寺。真言宗の総本山である高野山が、かつて女人禁制であったのに対し、神宮寺は女性の参詣が許されていたので、「女人高野」とも呼ばれ、多くの信者を集めてきました。

宝亀5(774)年に弘法大師の師である勤操大徳が開山、後の弘仁4(813)年に弘法大師が伊勢神宮参拝の途中にこの地を訪れ、来寺されたとき、師が開山された寺院である事に感激し、七堂伽藍(不動堂・鐘楼堂・閻魔堂・地蔵堂・観音堂・薬師堂・大師堂)を建立、整備されたという由緒あるお寺です。

その七堂伽藍の一つである閻魔堂(十王堂)は、長い参道で白壁が際立つ蔵のような建物で、明和8(1771)年に再建されています。安置されるのは赤い顔をした色鮮やかな閻魔王(閻魔天)を含む十王。正面の格子窓から中の様子を覗くことができます。

三途の河で出迎える奪衣婆、生前の罪の裁きの場でその判決を読み上げ、命令を記す司命・司録、人の行いを監視する人頭幢、赤鬼、青鬼が閻魔王の周りに勢揃いし、中でも憤怒の形相で恫喝する閻魔王の存在感は圧巻。裁きを下す王としての威厳があふれています。「丹生出身で四日市在住の方が県内外の閻魔王をいろいろ調べて資料を送ってくださり、このように大きく立派で十王が揃っているのは珍しいと伺いました」と寺の住職・岡本 祐範さん。

四季を通じて美しい景色が広がる境内を歩き、隅々までお詣りしました。大師堂へと続く石階段横には、回廊が設けられていますが、これは平成29(2017)年の台風で倒壊した後に再建されたもの。かつては高貴な方が雨風を凌ぎ、また敵から身を守るために作られたようですが、現在は参拝者も利用できるように解放されています。

大師堂のご本尊は弘法大師像で、これは大師が42歳のときの自画像と伝わり、寺院内の池に写された姿を「衆生の厄除と未来結縁」のためにと自らが刻み安置されたものだといわれています。大師堂隣には四国八十八ヶ所の石仏が並び、その裏手に鳥居が見えます。ここには弘法大師の守護神である丹生都比売を祀ります。前を通ってさらに進んで行くと、境内の一番高い所に火伏せの神、愛宕大権現の祠があり、丹生大師の伽藍を一望する景色が広がっています。

石階段を降りて戻り、観音堂へ。伊勢西国三十三所観音霊場の第十二番として、ご本尊である十一面観世音菩薩を祀ります。その奥には丹生神社が見えます。その社殿は伊勢神宮の式年遷宮の際に古い社殿を譲り受けたものです。明治の廃仏毀釈によって寺と神社は別々になりましたが、神宮寺にはそれ以前の神仏習合の時代が色濃く残されています。

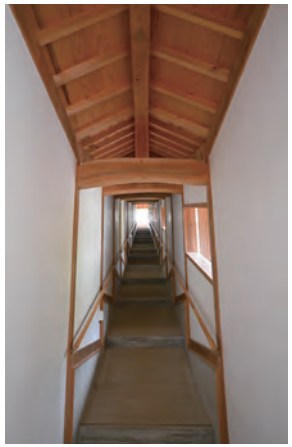
古くから水銀の産出地として栄えた丹生は、今でも格子戸や土塀などの風情ある町並みや由緒ある寺院も残り、丹生大師の門前として旅人をもてなしてきました。

和歌山別街道に面した寺の大きな山門(仁王門)は、修復を終えて令和元年に落慶されました。街道側に二体の仁王像、境内側には持国天、増長天の二天が安置され、寺と門前町を見守っています。

お問い合わせ

丹生山 神宮寺
TEL 0598-49-3001

白壁が際立つ閻魔堂



大師堂へと続く回廊

弘法大師像を祀る大師堂

神宮寺に隣接する丹生神社

街道に面した立派な山門